

# オアシス



## 二〇〇〇年のあゆみと未来への架け橋 ——グリム童話を考える⑨——

大野 寿子

二〇一二年一〇月二〇日(土)午後、東洋大学創立一二五周年記念事業の一環として、『グリム童話』刊行二〇〇年を記念する国際シンポジウム『グリム童話二〇〇年のあゆみ——日本とドイツの架け橋として——』が、白山キャンパス井上円了ホールにて開催された。

「グリム童話は本当に童話なのか?」、「古代研究者グリム兄弟の実像にせまる!」と銘打たれた本シンポジウムは、読売新聞東京本社共催を得て、九月半ばより数回の杜告のおかげもあり、一三〇〇件以上の応募申請をいただいた。さまざまな方面よりサポートしてくださったドイツ連邦共和国大使館、ドイツ学術交流会(DAAD)、公益財団法人日独協会、マールブルク市、カッセル・グリム兄弟博物館、グリム兄弟協会(ドイツ)、日本グリム協会、ダイヤモンド・ビッグ社には、この場を借りて御礼申しあげる。

グリム兄弟によって収集刊行された『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen、通称『グリム童

グリム童話は本当に童話なのか? 古代研究者グリム兄弟の実像にせまる!

2012年10月20日(土) 12:30~18:30  
(受付開始) 11:30~ (開会) 12:30~

会場: 東洋大学白山キャンパス5号館「井上円了ホール」  
住所: 文京区文京5-28-20 アオモリビル地下2階(三軒茶屋駅下車徒歩5分、東武有楽町線三軒茶屋駅下車徒歩5分)  
参加費: 東洋大学学生・教職員・関係者: 無料(当日券あり) 一般: 500円(当日券あり) 学生・教職員・関係者: 300円(当日券あり)

講演者: 大野 寿子 (東京大学文学部教授、ドイツ学術交流会(DAAD)理事、公益財団法人日独協会理事、カッセル・グリム兄弟博物館名誉館長、グリム兄弟協会(ドイツ)名誉会員、日本グリム協会名誉会員)

講演題目: 『グリム童話』の出版とドイツの文化政策、グリム童話の国際化、グリム童話の現代性、グリム童話の未来

講演者: 大野 寿子 (東京大学文学部教授、ドイツ学術交流会(DAAD)理事、公益財団法人日独協会理事、カッセル・グリム兄弟博物館名誉館長、グリム兄弟協会(ドイツ)名誉会員、日本グリム協会名誉会員)

講演題目: 『グリム童話』の出版とドイツの文化政策、グリム童話の国際化、グリム童話の現代性、グリム童話の未来

図1 グリムシンポジウムポスター(ダイヤモンド・ビッグ社制作)

話」が、どのような経緯で編纂されたのか。グリム兄弟といかなる人物で、グリム兄弟の生まれ故郷や育った環境が、彼らにどのような影響を与えたのか。挿絵と文字テキストとの関わり、グリム童話の日本における翻訳と受容についてなど、さまざまな角度からグリム童話をめぐる諸事象を検証し、グリム童話の実像にせまる本シンポジウムには、研究者、学生のみならず一般の参加者を含め、約五〇〇名が参加した。司会は、本学法学部の田中雅敏教授と筆者が務めさせていただいた。

\* \* \*

開会に先立ち、東洋大学学長竹村牧男氏よりご挨拶を頂戴した。本シンポジウムが、日本とドイツの学術交流推進の一翼を担うことへの展望が語られた。ドイツ学術交流会 (DAAD) 東京事務所所長のホルガー・フィンケン氏の挨拶では、本国ドイツで一九三二年に発足し、一九七八年以来東京に事務所を構えるドイツ学術交流会と、今後の東洋大学との共同企画や交流への期待が語られた。また、本学の協定校であるドイツ・マールブルク大学民俗学研究所所長カール・ブラウン教授からも、本シンポジウム開催に際して頂戴した祝辞の日本語訳が述べられた (翻訳は田中氏)。

\* \* \*

筆者による導入講演「グリムへのいざない」では、グリム童話とグリム兄弟について、とりわけ基調講演を聞くための基礎知識を説明した。「メルヘン」という語は、ドイツ語の Märchen



図2 大野寿子導入講演風景

間伝承の収集であり、いわゆる Poesie des Volkes (民の詩) であった。さらに、グリム兄弟は法学者でもあり、ゲッティンゲン大学教授、後にはベルリン大学 (現在のフンボルト大学) 教授をも務めた。このように、ヤーコプ・グリム (一七八五—一八六三年) とヴィルヘルム・グリム (一七八六—一八五九年) のグリム兄弟の足跡をたどりつつ、現在では彼らにゆかりの街々を結ぶメルヘン街道なる観光街道が人気を集めている点も、ダイアモンド・ビッグ社より提供いただいた「メルヘン街道イラストマップ」を参照しつつ提示した。

\* \* \*

第一番目の基調講演「マールブルク?」だがこの町自体はひ

が語源であり、多くの日本人が抱いている「ふわふわした」、「かわいらしい」、「乙女チックな」イメージとは異なり、本来は「童話」、「民話」、「昔話」、「笑い話」などを包括する「短いお話」を意味する。また、グリム童話は創作童話ではなく民

どく醜い』—グリム兄弟と故郷ヘッセンとの相反的関わり—」  
は、前マールブルク大学教授、現チューリヒ大学教授のハルム  
Ⅱペア・ツインマーマン氏によりドイツ語でなされた。グリム  
兄弟の故郷であるヘッセン（現在のヘッセン州、当時はヘッセ  
ン選帝侯国）と彼らとのアンビバレントな関連性を、往復書簡  
などの諸資料を手がかりに説くものであった。ヘッセンの小さ  
な町ハーナウに生まれ、シュタイナウ、カッセルと引っ越し、  
大学進学のためにマールブルクへと家族から離れて移り住んだ  
グリム兄弟は、狭い路地や螺旋階段など、今となつては観光名  
所にもなっている古風なありふれた町並みを（そのような風景  
をとりわけ日本人は、「中世の香り漂う」とか「メルヘンチッ  
ク」といって好むものであるが）、平凡で「醜く見るにたえな  
い」と酷評する。しかしながらいったんその地から離れ、見知  
らぬ土地で新たな生活を送ってみると、これまで「とるにたら  
ない」と思っていたものの真の価値に、彼らは気付いていく。  
懐かしさが生み出す「錯覚」が、ネガティヴな印象をポジティ  
ヴな回想空間へと変容させる。

「おそらく私には、実体よりもより美しく想像してしまうことが、  
少なからずあるようだ。（中略）そして思い出が（中略）私をたぶ  
ん惑わしているのだ。」（ヤコブ、一八〇二年）

「だが、想像力（ファンタジー）というものは、空虚で飾り気のな  
い空間を装飾し、活力を与えることも心得ている。」（ヤコブ、

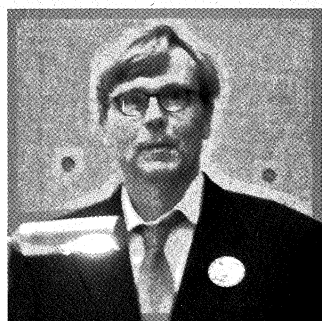


図3 ツインマーマン氏講演風景

一八三六年）

ポジティヴなかたちの故郷愛  
とは、「遠さの現象」すなわち  
「遠さの現れ出でたもの」である  
と氏は指摘する。グリム兄弟に  
とつて故郷ヘッセンとは、空間  
的な遠さと時間的な遠さ（すなわち過去の回想）を獲得しては  
じめて現れ出でる理念体であり、それは単なる空間ではなく、  
そこに暮らした家族との絆、そこで培った学問であり、人間関  
係そのものだったというのである。したがって「故郷愛」とは、  
「人間が人間らしく生きるための規範」をもたらずと結論付けら  
れた。

\* \* \*

第二番目の基調講演「文字から図像へ—一九〇二世紀にお  
ける『子どもと家庭のためのメルヒェン集』挿絵の歴史—」は、  
カッセル・グリム兄弟博物館館長のベルンハルト・ラウアー氏  
により行われた。一八一二年に刊行された『子どもと家庭のた  
めのメルヒェン集』第一巻初版（第二巻初版は一八一五年）に  
は、挿絵がまったく施されていなかった。しかしながら、一八  
二〇年に出版されたグリム童話オランダ語訳、一八二三年に英  
国で出版された英訳版には、美しい挿絵が施されており、この  
挿絵を施すというアイデアをグリム兄弟は、このような外国語

翻訳版から逆輸入したのだ。最終的にはメルヒエン二〇一話、聖人伝一〇話の合計二一一話となる『子どもと家庭のためのメルヒエン集』は、この完全収録版が「大きな版」、五〇話のセレクト版が「小さな版」と呼ばれ、後者には挿絵がふんだんに施されていた（その一部がシンポジウム当日博物館で公開された）。挿絵は購買意欲につながり、作品の世界観が、国境を越えて、より広くワールドワイドに伝わっていく原動力となったことは事実である。ところが、元来は時代的にも地域的にも限定されないグリム・メルヒエンの世界観に、挿絵画家の想像力が、中世の雰囲気を加えたり、郷土ヘッセンの風景を挿入させたりしたことも事実である。このように、挿絵作成によるイメージの固定化と「郷土化」がおこっていったと氏は指摘する。

「グリム童話はその最初の出版から二〇〇年のあいだに、翻訳や図像化によって、全世界へ広まっただけでなく、世界のさまざまな国で今日まで読みつがれ、時にはおのおのの文化圏へとほめこまれ、さらにその地に根付き郷土化しつつ、多種多様なやり方ですらなる発展を遂げてきたのです。」

日本語に翻訳されれば、特に明治・大正期には、時として和風な挿絵が施された。このように「おのおのの文化圏へとほめこまれ」てしまうこともあるのだが、それもまたグリム童話の魅力の一つだと氏は考える。挿絵の歴史こそ、グリム童話の解

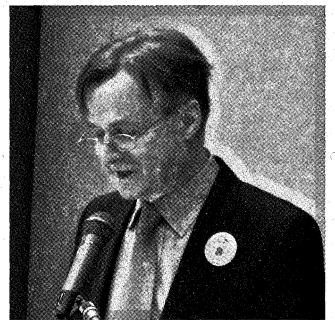


図4 ラウアー氏講演風景

の基調講演の講演通訳は、筆者が務めた。

\* \* \*

後半は、「『グリム童話』研究がつなぐ過去と未来」を総合テーマとしたシンポジウムに移り、日本を代表するグリム研究者ならびに伝承文学研究者による研究発表が、さまざまな角度から行われた。

まず、関西大学准教授溝井裕一氏は、「メルヒエンの世界観・伝説の世界観―変身譚を中心に―」と題し、「変身」という事象をテーマに、『子どもと家庭のためのメルヒエン集』とグリム兄弟のもう一つの民間伝承収集『ドイツ伝説集』（第一巻一八一六年、第二巻一八一八年）の世界観比較を試みた。「メルヒエン」は「より物語的」で、場所や時代が特定されないのに対し、「伝説」は「より歴史的」で、場所や時代がある程度特定される。動物や物への変身は、メルヒエンより伝説の方がより宗教性を帯びていることなどが説かれた。

次に、武庫川女子大学教授野口芳子氏により、「明治期におけ



図5 シンポジウム風景

る『グリム童話』の翻訳と受容」をテーマに、明治時代に日本へ伝わったグリム童話が、最初はドイツ語から日本語へと

直接翻訳されたのではなく、英語訳からの重訳であったことが、貴重な資料を示しつつ述べられた。

日本語訳に用いられた英訳本が成立した

のは英国ヴィクトリア王朝期であり、当時の検閲などの影響で、グリム童話の細部が書き換えられていた。そこには、神や悪魔などの宗教上の名称を避けたり、性的な描写を避けるなどの傾向がみられた。そのように翻案された英訳本が和訳されたため、ドイツ語原書と和訳の間の乖離がみられたという。こうして、文化的政治的事情と翻訳との関わりが、細やかに解説されていた。

最後に、奈良教育大学名誉教授竹原威滋氏の研究発表「『グリム童話』と比較民話学」では、グリム童話と日本を含めた世界各国の類話比較から、それらの国境や時代を超越した共通点に

言及された。グリム童話の誕生により、ヨーロッパ各地で伝承文学の収集が盛んになり、その結果、いろいろな地域で似たような話が残っていることがわかった。それを分類し分析したことが、比較民話学のはじまりであったとともに、柳田國男もグリム兄弟の民話収集の影響を受けていたことなどが説かれた。

「グリム童話をきっかけに、世界の民話に親しんで欲しい。そして、そこにある楽しさや教訓、先人の抱いた平和への思いに、子どもたちだけでなく多くの方々に触れて欲しい。」

このような氏の結びの言葉に、未来へつながるグリム童話のあり方の一つが提示されたようである。質疑応答は時間の関係で二、三件にとどまらざるを得なかったが、会場からは、グリム兄弟の歩んだ人生や童話作家であるデンマークのアンゼルセンとの関係についてなどの質問が寄せられ、観客席のラウアー氏や研究者を巻き込んだ議論がなされた。最後に、本学文学部長中山尚夫氏より閉会の辞を賜り閉会した。

\* \* \*

グリム国際シンポジウムに際しては、まず一〇月一五日より、グリム兄弟の生涯を、特に末の弟であり画家のルートヴィヒ・エミール・グリムの諸作品に描かれた兄弟の姿を手がかりにたどっていく内容のパネル展示が、井上円了記念博物館にて開催された。



博物館展示グラフィック幕 (戸部明美デザイン)

さらにシンポジウム当日のみ、グリム兄弟博物館から貴重な資料が一〇点展示された。そこに、雄松堂書店の協力により、ヴィルヘルム・グリムの一八一四年の直筆書簡が加わり、ミニ展示としては大変充実した内容となった。当日の休憩中、小さな博物館に多くの人が押し寄せ、長蛇の列ができたようである。以下、目録と若干のコメントを記す。

一、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』「小さな版」初版(ベルリン、一八二五年)。ルートヴィヒ・エミール・グリムの七枚の白黒挿絵。エドガー・テイラー旧蔵本。

\*グリム童話の最初の英訳者エドガー・テイラーのサインの入った初版本である。

二、『ハツ山羊』(東京、一八八七年)。グリム童話「オオカミと七匹の子ヤギ」メルヒェンの本邦初訳。カラー挿絵付き。

三、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』「小さな版」(ベルリン、一八八五年)。パウル・マイヤーハイムのカラー挿絵付き。

四、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(フイールッピン、一九世紀末)。四枚のカラー挿絵付き。

五、『子どもと家庭のためのメルヒェンの花束』(ベルリン、一八八二年)。ヴィクトール・パウル・モーンのカラー挿絵付き大判豪華本。

六、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(シュトゥットガルト、一九世紀末)。さまざまなイラストレーターのカラード挿絵付き特選版。

七、『マリアの子ども』(マインツ、一九一〇年頃)。ハインリヒ・レフラ、ヨーゼフ・ウルバンによる挿絵付き。横長判・大判。

八、『カエルの王様』(マインツ、一九一〇年頃)。エルンスト・リーバーマンによる挿絵付き。横長判・大判。

九、『勇敢なちびの仕立屋』メルヒェンのカラード挿絵(一八九〇年頃)。リービック社の保存肉付録の広告カード。

\*リービック社の保存用の肉を買うと付いてくる、おまけカードで、裏面には当該商品の広告が印刷されている。永谷園のお茶漬け海苔に付いてくる、東海道五三次などのカードのようなものであろう。

一〇、『ガチョウ番の娘』メルヒェンのカラード挿絵(一八九〇年頃)。



リービック社の保存肉付録の広告カード。

展示物の数は確かに少なくはあるものの、「小さな版」初版本は極めて貴重であり、カッセルでは入場料を払って見るべきコレクションが無料で観覧できたことに、感謝している来場者が多かった。一方で、もう少し開館時間を延ばしてほしかったという叫びにも似たコメントが、後で寄せられた。なお当日は、ドイツ連邦共和国大使館からも関係者が参加され、多数の来場者に驚かれかつ喜ばれていたことを付言しておく。本シンポジウムが、今後の東洋大学国際交流の礎となれば、企画者としてこれ以上うれしいことはない。最後に、助けてくださった学内学外のすべての方々に、厚く御礼申しあげる。

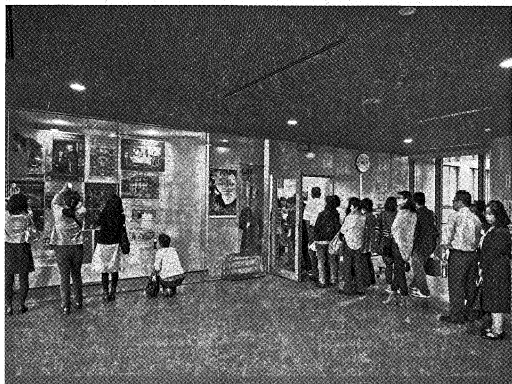


図7 博物館展示風景①



図8 博物館展示風景② ポスターギャラリー



図9 博物館展示風景③ 特別展示（一番右：「小さな版」初版）

— おおの ひさこ・文学部准教授 —